国際協力特別賞

わたしのワンピース

愛知県立千種高等学校　１年　石原　実桜

「私は、小学校のお勉強が大好きです。将来はエンジニアになりたいです！」―これは、JICA 地球ひろばを訪れた際に見た、ウガンダの小学生へのインタビュー映像での言葉だ。まんまるな目をキラキラと輝かせて、夢を語る少女を見て、私は羞恥心で泣きそうだった。普段「勉強だるい～。」「課題面倒臭い。」と嘆く自分がどれだけ浅はかでちっぽけであるかを思い知らされた気分だった。そして、途上国の教育現場のあまりの杜撰な状況を目の当たりにして、SDGs の教育の分野に興味をもつようになった。

調べていくうちに、途上国の教育問題として「識字率の低さ」があることを知った。識字とは文字の読み書きのことである。現在、８億人もの人々が識字のできない状態だと言われているが、それはすなわち私たち日本人がサウジアラビア語に囲まれて過ごしているようなものだから、日常生活どころか就職や金銭の仕組み、政治参画なんて似ての外だろう。実際に途上国の授業風景の再現を見たことがあって、スペルミスだらけのノートやそもそも先生の計算すら間違っている板書を見てがく然とした。これでは負のループが続いてしまうと思った。

では、途上国の子供の識字率を上げるためにはどんなことが有効なのか。考える中で、とあるネットの記事を見つけた。無印良品銀座店で、日本の絵本をビルマ語に翻訳してミャンマーに届けるワークショップが開催された、というものだった。絵本は、識字能力や語彙力向上という面だけでなく感受性や人間性にも影響を及ぼすと言われている。自分自身が絵本の大好きな子供だったので、このアイデアを知って心から感動した。

ワークショップには参加できなかったが、さらに調べていくとシャンティ国際ボランティア会の「絵本を届ける活動」に行き着いた。自分もやってみたいと思いオンラインで活動に参加した。その時、私に送られてきた一冊は「わたしのワンピース」だった。小さい頃に、全て丸暗記するほど大好きだった思い出の一冊。そんなこの本が自分の手によって途上国の子供に届けられ、またその子の大切な一冊になるかもとワクワクしながら翻訳シールを貼っていった。

この本の面白いところは「カタカタ」「ラララン、ロロロン」などというオノマトペが多用されていることだ。この日本語特有の表現を、ビルマ語ではどう訳すのだろうかという疑問と同時に、日本語表現の奥深さを通して自分の国の魅力を再認識する機会になった。

さらに懐かしくなった私は、母に「小さい頃の絵本、まだとっておいてある？」と尋ねた。母は全部とっておいてくれていて、その中に「わたしのワンピース」もあったので今度は翻訳シールを貼るのではなく自分で翻訳をしてみようと思った。やはり言語の壁は強く、日本語を英語にするだけでも難しかった。けれど、簡単で似たような表現に訳してみたり、オノマトペは「ＫＡＴＡＫＡＴＡ」というようにローマ字でそのまま残したり、自分なりに工夫することができた。自分なりの訳し方は、正しい完璧な英語ではないかもしれないけれどそれが翻訳の醍醐味だし言語の面白さかなと思った。この面白さを、途上国の子供たちもいつか味わえる日が来るように。

SDGs 四番の教育問題は全ての SDGs に繋がっていると言われている。そもそも、文字の読めない人にとっては「SDGs」という言葉すら無縁であるし何が問題でどんな解決策があるかなど分からない。結果、先進国が途上国を支援するという一方的な構図がだらだらと続いているように私は思う。途上国の人々がまず十分な教育を受け、現地の彼ら自身が自国の問題を知らなければ SDGs は何ひとつ変わっていかない。それのほんの手助けをしつつ、日本のもつ魅力的なものを世界に共有できる、この「絵本を届ける活動」にこれからも関わっていきたいと思う。